

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	多系統委縮症患者における気管切開の必要性についてのインフォームドコンセントはどうあるべきか？
演者名	星野将隆
所属	船橋総合病院 内科・神経内科

(目的及び方法)

多系統委縮症 (MSA) は、声帯開大不全や誤嚥性肺炎等による呼吸不全を発症するため、突然死の予防等のために気管切開を必要とする事が知られている。しかし、いつ、どの様にその必要性を伝えて納得頂くかについては苦慮することが多い。今回、インフォームドコンセントのあり方の一助にするために、気管切開術をうけて頂く機会を得た 3 名の MSA 患者のご家族にアンケートを行った。

(対象及び結果)

症例は、Shy-Drager 症候群の 68 歳男性、MSA-C の 62 歳女性、及び MSA-C の 66 歳男性。3 症例の御本人・御家族とも、急変を含めた呼吸不全が生じること及びその予防には気管切開が必要であることは理解していた。しかし、いずれも御本人は気管切開が必要な時期まで踏ん切りがつかず、呼吸状態が悪化した時に、御家族が躊躇しながらも仕方なく同意したという結果であった。また、御家族は気管切開して良かったと答えたが、御本人の立場に立つと良かったのかどうか分からないという事であった。気管切開してからの更なる病気の進行や介護の大変さについての説明が、気管切開に対して否定的なイメージを植え付け、気管切開をしない方向に誘導する可能性をはらんでいるかとの問いにも、それでも十分に説明することは重要であるとの意見を頂いた。

(考察)

多系統委縮症の呼吸不全発症の説明は、その後の生活介護状況も考慮し、気管切開を行うことの利点、欠点両側面から行う必要がある。しかし、それでも、自らの意志で積極的に予防的気管切開に踏み切ったり、気管切開を受け入れないと決定できる患者はほぼ皆無であり、呼吸状態の悪化にともない、なし崩し的に気管切開を行う症例が多い。御本人、御家族以外にも、ケアマネ、訪問看護等多職種で状況を把握しながら、気管切開の適否やその時期について検討するための説明方法等を含めたガイドラインが必要であると考えられた。